

下村加茂遺跡

—— 弥生前期の木製品と中世館跡等の調査 ——



A地区全景(北上空から)

1998年3月

下村教育委員会



図1 下村加茂遺跡の位置 (○印) 5万分の1



遺跡の位置

遺跡は、富山県射水郡下村加茂中部にある。富山平野のほぼ中央に位置し、遺跡の北西約1.5kmには、現在富山新港となっている放生津潟があった。放生津潟の南に広がる平野は射水平野と呼ばれ、海拔1 m以下の低湿地帯として知られる。射水平野は、その大半がおよそ6,000年前の縄文海進期に、海底に没したことがあり、その後遺跡の南側を流れる鍛冶川などの河川によって運ばれた土砂が堆積して陸地となったものである。鍛冶川は、遺跡の南方3.5～5 kmにある呉羽丘陵と射水丘陵の谷から流れ出し、放生津潟をへて富山湾へと流れ出る。陸上交通がさかんとなるまでは、放生津潟東部地域の水運の動脈でもあった。

調査に至るまで

下村では、集落環境整備事業の一環として、加茂中部の加茂神社北側一帯において、水郷の里（とねりこ広場）を建設する計画を立て、平成7年度から工事を開始する予定であった。また、富山県では、その隣接地で農免農道（県道）を建設する計画を立て、平成6～9年度に工事を実施する予定であった。ところが、加茂神社は、「稚児舞」（国指定無形民俗文化財）や「やんさんま祭」・「御田植祭」（ともに県指定無形民俗文化財）などの神事を伝承していることや、中世荘園倉垣荘の総社であったと考えられていることから、その隣接地にあたる事業区域内に埋蔵文化財の存在が予想された。そこで、富山県埋蔵文化財センターと下村教育委員会は、埋蔵文化財の有無を確認するため、平成7年4月18日事業地内を踏査した。その結果、古代・中世・近世の遺物の散布が認められ、これまで知られていなかった埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が存在していることがわかった。遺跡は、下村加茂遺跡と呼ばれることになった。そして、工事が予定どおり実施されると遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、遺跡の遺存状況をさらに詳しく調べるために、平成7年5月に試掘調査を実施した。その結果、水郷の里敷地内では約4万9,000㎡のうち約4万㎡が、農免農道敷地内では2,200㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれことが判明した。

以上の結果をもとに、遺跡の保護と工事の調整をはかるため、工事関係者である村産業建設課・高岡農地林務事務所と協議を重ねた結果、水郷の里では、芝貼り・植栽部分は盛土保存とし、水路・管理棟・駐車場・築山・農道部分11,420㎡は本調査を実施することに、農免農道は、2,200㎡全体を本調査することとなった。本調査は、平成7年7～9月に水郷の里の北西部の水路部分800㎡を、同年11～12月に水郷の里の南西部の水路部分250㎡を、平成8年4～6月に水郷の里の南西部の水路とあずま屋部分650㎡を完了している。



写真1 発掘作業風景

調査の経過

農免農道並びに水郷の里建設に伴い発掘調査が必要となった箇所のうち、平成9年度以降に調査が持ち越された箇所と面積は、農免農道部分、水郷の里の管理棟部分・駐車場部分・水路部分(1,400㎡)・築山部分(3,000㎡)・農道部分のあわせて10,300㎡である。これらの調査は、平成9年度に農免農道部分2,200㎡、水郷の里の管理棟部分600㎡・駐車場部分1,500㎡・農道部分の1,600㎡のあわせて5,900㎡を対象とすることとし、残りは平成10年度に実施する計画で調査に着手した。

調査は、5月1日から開始した。調査対象地のうち、農免農道部分と管理棟・駐車場部分は、近接していることや中央に排水路があり東西に分断されることから、排水路西側の農免農道部分・駐車場部と管理棟部分で一ブロック、排水路東側の農免農道部分・駐車場部分で一ブロックとする調査区を設定し、前者をA地区、後者をB地区と呼ぶこととした。調査はA地区から開始したが、調査を進めていくと、遺跡の西端と考えていた鍛冶川の中から弥生時代前期の木製品が大量に出土した。そのため、調査対象地が西側へ広がることになり、また木製品の発掘・記録に時間と手間がかかることになった。しかし、遺跡が昭和47年に行われたほ場整備事業により削平されていて遺物包含層が残っていないこともあり、調査は全体的にかなり早いペースで進み、B地区は7月後半に終了した。一方、A地区管理棟部分では、倉垣荘の荘官館ではないかと考えられる堀で囲まれた屋敷地が確認された。そこで、管理棟の位置を変更しその部分を盛土して保存することになり、新たな管理棟建設地の調査も必要となった。水郷の里のなかで工事に時間がかかる築山部分の調査を早く進めたいという要望も出された。B地区終了後は、築山部分(C地区)の調査を行い、そのあと10月に新管理棟部分(D地区 500㎡)と農道部分(E地区)の調査を行った。11月はA地区の鍛冶川内の下水管下の掘り下げ、遺構面を保護するために川砂で被覆し、11月14日に平成9年度の発掘調査を終了した。最終的な発掘面積は、A地区3,170㎡、B地区1,455㎡、C地区3,700㎡、D地区

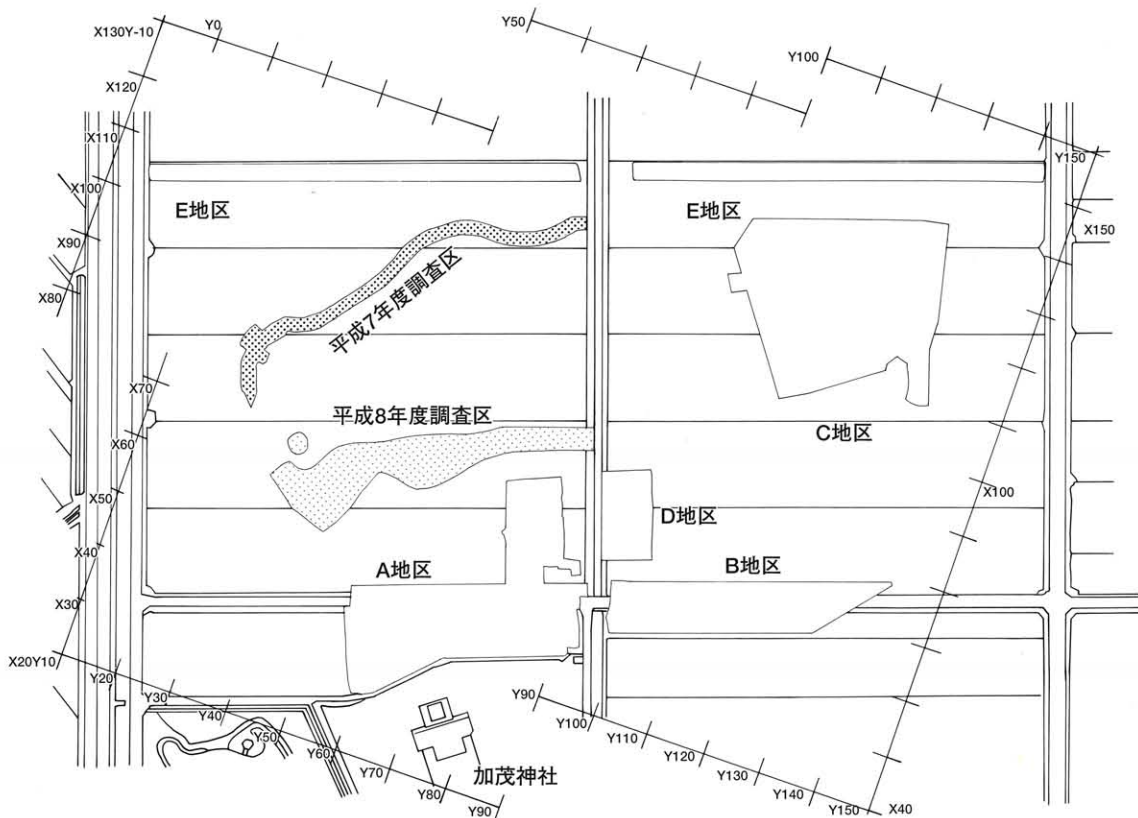


図2 調査箇所位置図 (4,000分の1)

540㎡、E地区1,785㎡、合計10,650㎡である。そのうち農免農道にかかる面積は2,146㎡、水郷の里にかかる面積は8,504㎡である。

調査日誌 (抄)

- 5/1 A地区表土除去開始
- 5/8 A地区基本杭設定
- 5/12 A地区遺構検出開始 (先のほ場整備時にかなり削平を受けているため包含層はない)
- 5/23 旧鍛冶川跡 (SD15) より条痕文土器が出土したため調査区を拡張 (当初、ほ場整備前の河道と判断していたため調査対象範囲からはずれていた)
- 5/28 SD15より弥生土器・木製品 (竖杵・桶・柱など) 出土
- 5/30 採土穴群掘削開始
- 6/10 下村小学校6年生見学
- 6/11 SB01内にカマドを確認
- 6/13 B地区表土除去開始
- 6/17~6/19 A地区ブロック撮影
- 6/18 SD15より鋤状品出土
- 6/19 木の葉形鋸・剣形木製品・鳥形木製品出土
- 6/20 記者発表 (新聞一面トップ記事に!!)
台風7号本州上陸
- 6/24 A地区全景写真撮影
B地区遺構検出開始
- 6/25 この年初の真夏日!!
- 6/26 SD15より鋸の柄出土
B地区遺構掘削開始
- 6/27 B地区基本杭設定
- 7/2 A地区航空測量
- 7/15 B地区全景写真撮影
- 7/19 梅雨明け
- 7/24 B地区航空測量
- 7/29 新湊市立作道小学校6年生が見学
(県埋蔵文化財センター主催ふるさと考古学教室)
- 7/30 SD15の樹種同定のためのサンプル採集
(県木材試験場の塚本英子氏)
- 8/1 SD15の珪藻分析のためのサンプル採集 (邑本順亮氏)
- 8/9~8/17 盆休み
- 8/20 SD15の花粉分析のためのサンプル採集
(富山大学人文学部大学院生の山崎雅恵氏)
- 8/21 記者発表
- 8/23 現地説明会 県内外より200名ほどの参加者がある
- 8/28 県埋蔵文化財センター普及講座の見学会
- 9/9 A地区管理棟部分及びSD15の一部が盛土保存されることになる
- 9/17 石川県小松市八日市地方遺跡発掘調査担当者来訪
- 9/22 SD15よりタモ・櫂出土
- 9/29 SD15よりくりもの・舟 (後に槽と判明) 出土
- 10/2 SD15の2回目の珪藻分析のためのサンプル採集 (邑本氏)
- 10/15 下村村報に記事掲載
- 10/21 東京都立大学山田昌久氏・青森県一戸町高田和徳氏来訪
- 10/23 大阪府立弥生博物館渡辺昌宏氏来訪
SD15写真撮影
- 10/29 SD15の航空測量
- 11/7 掘削終了
- 11/11~11/14 保存箇所埋め戻し
- 11/14 調査終了



写真2 表土除去



写真3 土層図化作業



写真4 現地説明会



写真5 樹種同定用サンプリング

A地区の概要

A地区は、加茂神社のすぐ北側にあたる。現況は農道と水田で、水田の高さは海拔20~40cm、農道の高さは海拔1mである。水田面から遺構確認面までの深さは約15~35cmである。その間の土は水田耕作土であり、遺物包含層は認められなかった。遺構確認面の高さは、海拔10~20cmで東側がやや高くなっている。遺物包含層がほとんど残っていないが、鍛冶川の中では時代の異なる土層の堆積が認められること、遺構確認面にキャタピラーの跡が残っていることなどから、本来あったはずのものが、江戸時代以降の開発あるいは昭和47年度に行われたほ場整備事業によって削平されたものと考えられる。以下では、鍛冶川(SD15と呼ぶ)の埋積土を参考に、遺跡に堆積している土の基本的な層序を示しておきたい。

SD15の堆積土を大きく分けるとI~IX層の9層である。その特徴は以下のとおりである。VI層からVIII層は、それぞれの中が縞状になっていて、薄い層の集合である。遺構確認面の土は黄灰色粘土質シルト(X層、厚さ約10cm)で、さらにその下は白色または青灰色の砂(XI層、厚さ110cm)が堆積している。また、SD15の川底面にやや堅い白色の粘土層(XII層)が認められる。(第3図)XI層からはおびただしい湧水がある。

SD15基本土層

- I層 暗褐色シルト(水田耕土) 厚さ約15cm
- II層 黒褐色シルト(旧耕土) 厚さ約10cm
- III層 黒色砂質シルト(近世遺物包含層) 厚さ約10cm
- IV層 黒褐色シルト(中世遺物包含層) 厚さ約10cm
- V層 オリーブ黒色シルト(弥生前期遺物包含層) 厚さ約25cm 木器・植物遺存体を多く含む。
- VI層 黒褐色シルト質砂(弥生前期遺物包含層) 厚さ約90cm 木器・植物遺存体を多く含む。
- VII層 黄褐色砂 厚さ約60cm 大きく5層に分かれる。
- VIII層 灰色砂 厚さ約50cm 砂と黒褐色砂が縞状に堆積。
- IX層 黒色砂質シルト 厚さ約10cm 川岸付近に残る。

出土した遺物・遺構には、弥生時代前期、古墳時代、(甕の胴部片が1点あり、弥生前期の可能性もある。)平安時代、鎌倉~南北朝時代、室町~安土桃山時代、江戸時代前期のものがある。主なものを以下で解説する。



写真6 SD15の土層

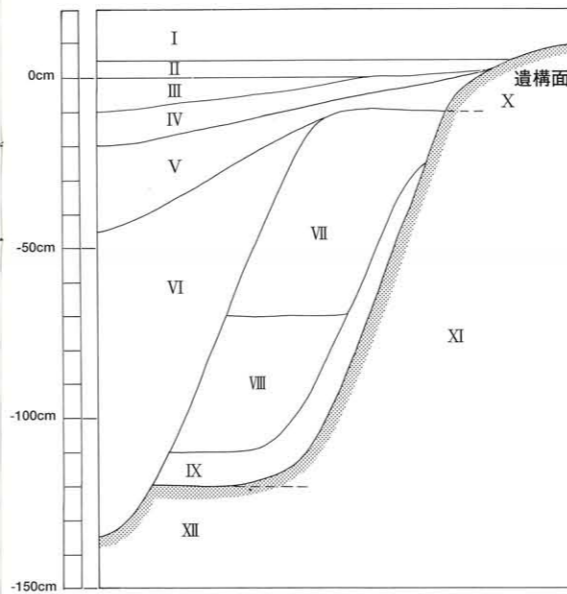


図3 基本土層模式図

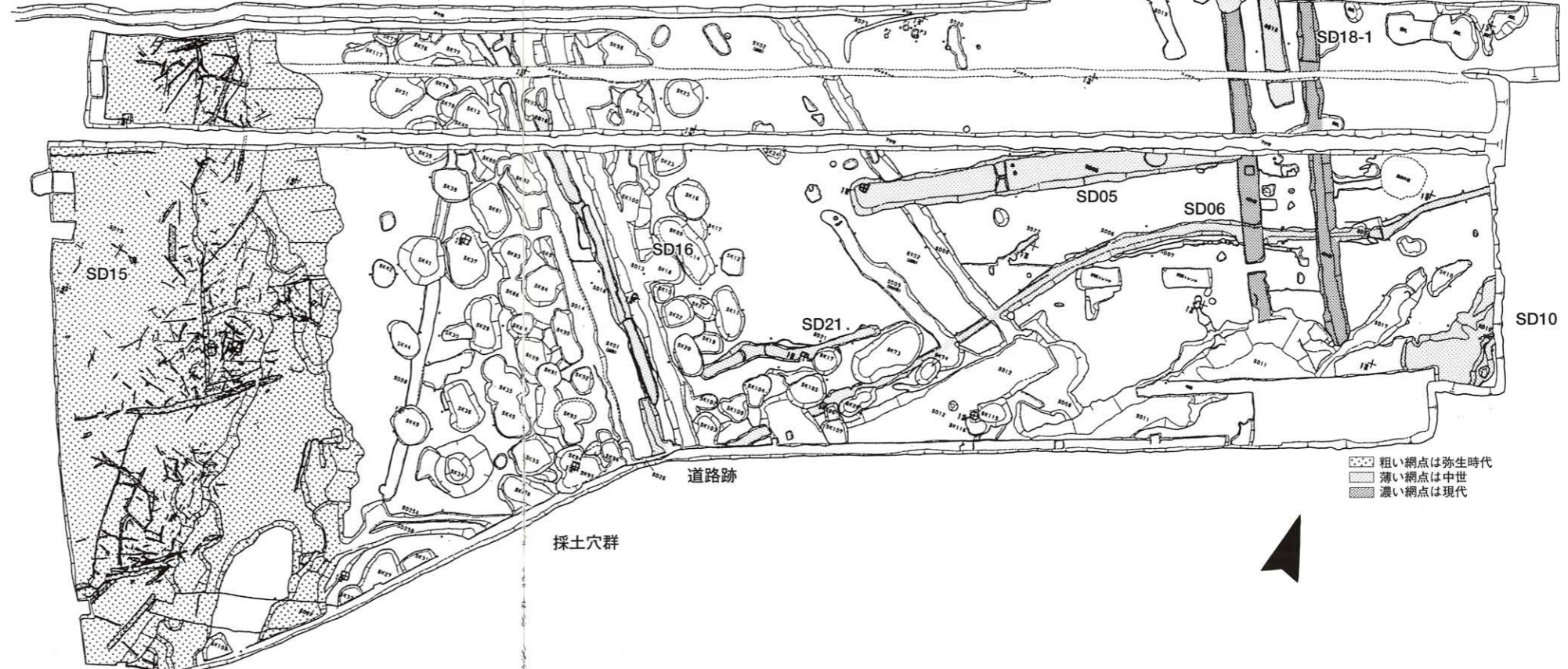
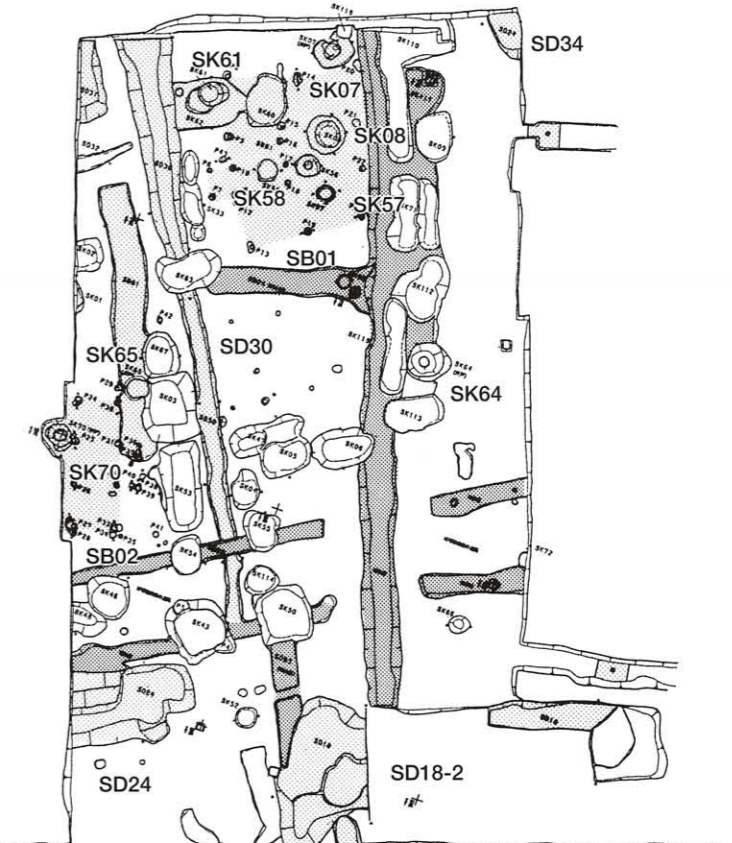


図4 A地区遺構図(300分の1)

粗い網点は弥生時代
 薄い網点は中世
 濃い網点は現代

弥生時代前期の貯木場跡

弥生時代前期の貯木場跡とみられる遺構は、旧鍛冶川の中にある。鍛冶川は、昭和14年に西方約500mに新鍛冶川ができ、昭和47年に西方約100mに東部7号排水路が作られたことによって、その流れは無くなった。だが、それ以前は幅10～20mで、現在の加茂神社のすぐ西側を南東から北西方向へ屈曲しながら流れていた。試掘調査によれば、その川幅は最大で50～90mもあった。A地区の西端はその川の右岸にあたる。流路が加茂神社の横から東へ曲がり、その岸を弧状にえぐって西へ流れを変えるところである。明治時代の川岸はその一番入り込んだ所から約15m西側にあり、昭和47年の川岸はさらに15m西側に移動していた。鍛冶川の川幅と流路は、時代によって変化していることがわかるが、弥生時代前期の木器は、鍛冶川が一番入り込んだ川岸と明治時代の川岸との間で発見された。貯木場跡は、弥生時代前期以降に鍛冶川の流れが西へ移行したこと、その包含層が0m以下にあって地下水に浸かっていたために保存されたものである。

貯木場が設けられていた鍛冶川は、深さが約1.4mである。しかし、貯木場として用いられたのは、その川が1m近く埋積した後のことである。切り倒された木材や木器、土器や石器は、基本土層のV層下部からVI層上部の海拔マイナス40cm前後のところで出土した。VI層は植物質とシルト質の砂が混じったもので、白い砂が縞状に堆積していることから、強い水の流れによって堆積したことがわかる。しかし、V層は植物質や木器をあまり含まず土にも粘りがあり、水が淀んだ状態であったことが考えられる。木材や木器は、岸辺から約10mのところ帯状に連なっている。切り倒された木材は、周辺に生えていたものを、当時の人が伐採して、後で利用するために川縁に投げ入れたものと考えられる。木器は上流から貯木場へ流れ着いて溜まったものと考えられる。集落はこの南側にあったものであろう。



写真7 SD15貯木場跡（北から）

- 1 コナラ
- 2 ハンノキ
- 3 ハンノキ
- 4 コナラ
- 5 ハンノキ
- 6 槽
- 7 トネリコ
- 8 スギ
- 9 くりもの(ハンノキ)
- 10 ムクロジ
- 11 鋤
- 12 權
- 13 たもの梓
- 14 鋤状品
- 15 バチ形木器
- 16 鳥形
- 17 竪杵
- 18 厚板
- 19 桶
- 20 剣形
- 21 柱
- 22 紡錘車の軸
- 23 礎板
- 24 木の葉形鋤
- 25 トネリコ
- 26 鋤の柄
- 27 鋤の柄
- 28 ハンノキ
- 29 ハンノキ
- 30 トネリコ
- 31 ハンノキ

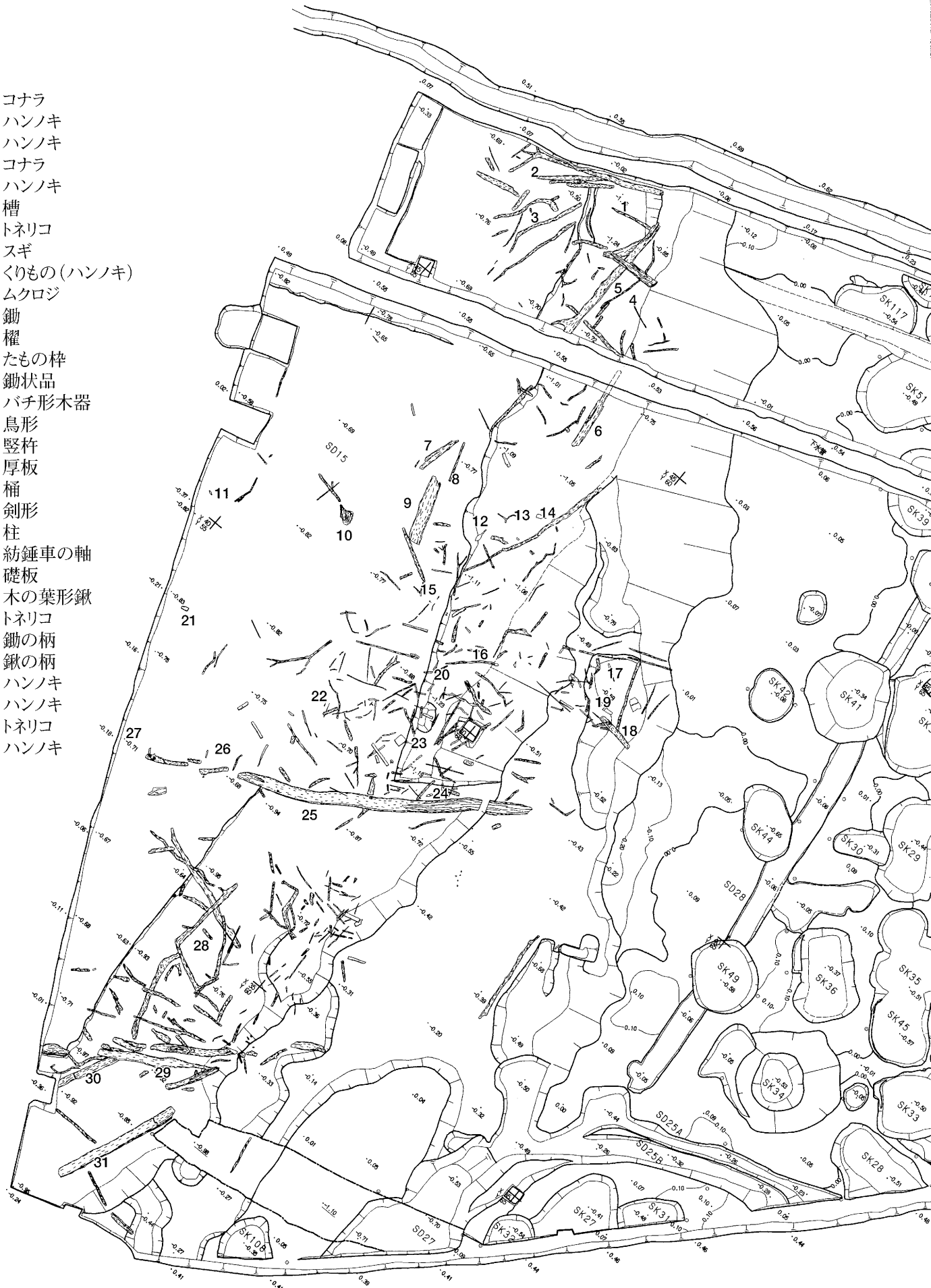


図5 SD15 木材・木器 出土状況 (150分の1)

木器・木材・種実

貯木場跡から、農具、紡織具、漁撈具、容器、祭祀具、建築部材など生活全般に関わるものが約400点出土した。その他に、切り倒した木材や植物の種実がある。おもなものを紹介しておく。

農具 鋤（1・3・5）・鋤（2・13）・豎杵（6）・編板がある。1は柄孔が丸い鋤の柄とみられる。長さ106cmの心去り棒で、断面を径2.8cmに丸く削り出している。3は鋤の身部とみられる。身の平面形は肩が丸く先が尖る木の葉形である。身の断面は中央が厚く縁が薄い紡錘形である。上部に着柄軸が付き膝柄の柄が付くものと考えられる。5は鋤柄の先端部分とみられる。断面方形の突起があり、その突起を柄孔が方形の鋤身に差し込み、突起の穴に栓をして固定する。鋤の厚みは約1cm、着柄角度約60度である。2はT字形をした鋤の把手とみられる。広葉樹を用い柄部との境に段を設け、全体にていねいに磨かれている。櫂または杖の可能性も考えられる。13は先端を欠くが、身は肩がやや張る方形で、長さ12.5cmの断面が四角い柄が付く。針葉樹の板目材を用いている大型の杓子あるいは軍配のようなもので、農具ではないかもしれない。肩部の形状が左右で異なるので、未製品の可能性がある。6はつき部の直径が4.5cmの細いもの。にぎり部には節を持たない。片側のつき部は欠けているのかもしれないが、無かった可能性もある。長さ55cm。編板は写真に載せていないが、板の側辺に三角と四角の刻みがある。三角刻みの間隔は14.3cm、四角刻みの間隔は15.4cmである。刻み間隔から、俵や菰などを編む道具と考えられる。

紡織具 紡錘車の軸（7）・経巻具（8）・緯打具（9）とみられるものがある。7は断面が直径8mmの棒で、片方が尖がっている。8は両端に立木などに結びつけるためのえぐりがある。えぐりの間隔から布幅は24cmほどであったとみられる。9は糸を押し込む部分がほとんど欠けているが、一方が薄く尖り、反対側は四角くなっており幅4.5cmの厚みがある。残っているところは端の手に握る部分とみられ、手すれにより摩滅している。

漁撈具 櫂（10）・たも網杵（11・12）がある。10は柄の上部を欠くが、身は肩が丸く先が尖る木の葉形で、断面は平坦である。鋤の可能性も考えられるが、スギ材とみられること、柄がやや偏平で一木であることから、櫂とみる。11は、枝分かれた木を利用し、幹を柄、枝を杵にしたもの。柄は断面がかまぼこ形で先に三角形の頭部を作り出す。別木の柄をあて紐で縛って取付けたものとみられる。12は、断面形が11と同様の頭部を持つもので、たも網などの柄になるとみられる。断面かまぼこ形の柄の中には、木釘が2箇所打ち込まれているものがある。紐で縛るほかに木釘で固定する方法もあったことがわかる。



写真8 SD15木器出土状況



写真9 SD15土器出土状況

容器 桶 (14) ・桶の底板あるいは蓋・槽やくりものがある。14は断面が丸く、内面下部に底板をはめ込むための肥厚帯がある。内径約16cmである。写真10は直径50cmの丸木を厚さ約3cmにくりぬいたものである。丸木舟とみていたが、外面が表皮のままであるので、槽の一部であるらしい。写真11は、直径40cm長さ2.2mのハンノキを円筒にくり抜いたもの。井筒などに用いられるものとみられる。縁の厚さは3.5cm。加工途中のものである。

祭祀具 鳥形 (15) ・剣形 (16) ・鋤状品 (4) がある。15は、板の一方をくちばし状にとがらせ、他方は段状の削りを加えて尾を表現している。側面と腹部に粗いえぐりがある。側辺のえぐりには羽根が取り付けられたものであろうか。下のえぐりは棒などへの装着のための工作と考えられる。16は、先が尖り、断面を菱形にして鑄を表現している。下部の両側辺を削り柄部を作る。剣や槍などを象ったものである。4は身の両側辺と先端部が欠けていて全体が不明であるが、身の上部に左右2カ所に穴があいている。上部の軸と穴の間の軸に柄を縛りつける組合せ鋤と報告されているものとよく似ている。着柄軸は一辺約1cmで細く、身の断面は厚さ1.3cmである。針葉樹の柁目板を用いており、鋤としては実用的ではなく、矛などの武器を形どった祭祀具の可能性も考えられる。

建築部材 柱・礎板・壁 (床) 板とみられるものがある。柱には幅12cm厚さ7.5cmの角柱や幅10.5cm高さ16cmの貫穴のある丸柱などがある。

木材 おもな木材は、長さ12.6m太さ46cmのトネリコ属、長さ9.6m太さ47cmのハンノキ、長さ5.2m太さ25cmのコナラがある。スギの枝材なども出土している。樹種識別は富山県林業技術センター・木材試験場の塚本英子研究員が行った。また、木器の加工を行っていたことを示す幅5～6cm厚さ3～8mmの削り屑も出土している。

なお、トネリコ属について放射性炭素C14年代測定を行ったところ、その年代値は次のとおりであった。

2,260年前 (誤差+240・-230、1,950年基点、Lab NoPAL - 245)

測定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。

種実 これまでに、炭化米・ヒョウタンなど25分類群の種実遺体が確認されている。

種実同定は、立山博物館の吉井亮一主任が行った。

表1 種実遺体一覧

分類群
アカマツ
オニグルミ
ヤシャブシ亜属
ハンノキ亜属
ハンノキ
コナラ属
コナラ亜属
コナラ節
コブシ
オニバス
ハス
マツモ
バラ科 (不明)
アカメガシワ
トチノキ
クマヤナギ属
ブドウ属
ヒョウタン
ヒシ
ミズキ
エゴノキ
イネ
スゲ属
ホタルイ属



写真10 SD15槽か舟



写真11 SD15くりもの



写真12 SD15出土木器 (1)



写真13 SD15出土木器 (2)

土器・石器

土器・石器のほとんどすべては、旧鍛冶川（S D15・17）の木器の出土した地層と同じところから出土した。その量は少なく、整理箱3箱である。特徴的なものを第6図に図示した。（写真14）

土器（1～8）1～6は条痕文土器である。条痕は貝殻によるもので、条幅は1～3・5・6が1～2mmで細く、2・4が2～3mmとやや広い。条痕は横方向あるいは斜めに施される。内面はナデあるいはヘラミガキするものが多い。1・2・4は口縁部が内湾ぎみに立つ深鉢である。1は口縁部に双頭の突起が付いている。2は口唇部に連続した押圧が施され口縁部がさざ波状となる。3・5は同一個体とみられるが、口縁部の端部がわずかに外反する深鉢である。6は底部である。色調は1・3～5は褐灰色、2・6は灰黄褐色である。1・3・5は内面に、2は外面に炭化物がこびりついている。7は壺の底部である。外面は縦方向のハケメの上からヘラミガキを行い、内面は横方向のハケメを丁寧に施す。底部は大きいわりに薄く、胴部との接合部分に指先を押しつけた爪痕が残る。このような土器は類例を知らない。8は遠賀川式系とみられる壺の胴部である。外面はヘラミガキ内面はナデである。色調はいずれにもぶい黄橙色である。他に、胴部外面に縦方向のヘラケズリを施す黒褐色の深鉢がある。（写真14の15）

石器（9～11）9は石鏃である。有茎式で、石材は安山岩である。長さ2.6cm。10はこぶし大の軽石である。中央に幅約5mm深さ1mmの溝が巡る。溝はそこに紐を縛りつけたと考えられるので浮子とみられる。軽石は上市町江上A遺跡では刃物を研ぐ砥石として用いられており、砥石の可能性もある。10は花崗岩製の打製石斧（土掘り具）である。頭部と刃部を欠く。このほかに、S D15の分流であるS D17から泥岩製の砥石が出土している。（写真14の14）

土器・石器の編年的位置づけ 土器は、縄文土器の系譜を引く条痕文深鉢やヘラケズリのある深鉢と、北部九州に起源をもつ遠賀川式系の壺、縄文的な底部作りのハケメの壺がある。石川県の土器編年では、口縁部がさざ波状となる条痕文深鉢は、弥生時代のⅠ期（前期）からⅡ期（中期前葉）にかけて存在する。Ⅱ期は、畿内から伝播したとされる櫛描文土器を伴う。本遺跡では櫛描文土器が出土していないことから、Ⅰ期古段階（土器様相や放射性炭素C14年代の測定結果からみて今から2,250～2,300年前）に位置づけられる。石器は縄文時代以来の石鏃・打製石斧に弥生時代に始まる鉄刃物の使用を物語る砥石があり、縄文時代の生活様式に弥生時代的な生活様式が新たに加わった弥生時代前期の様相を示しているものといえる。以上のことから、一緒に出土した木器も同時期のものと考えられる。

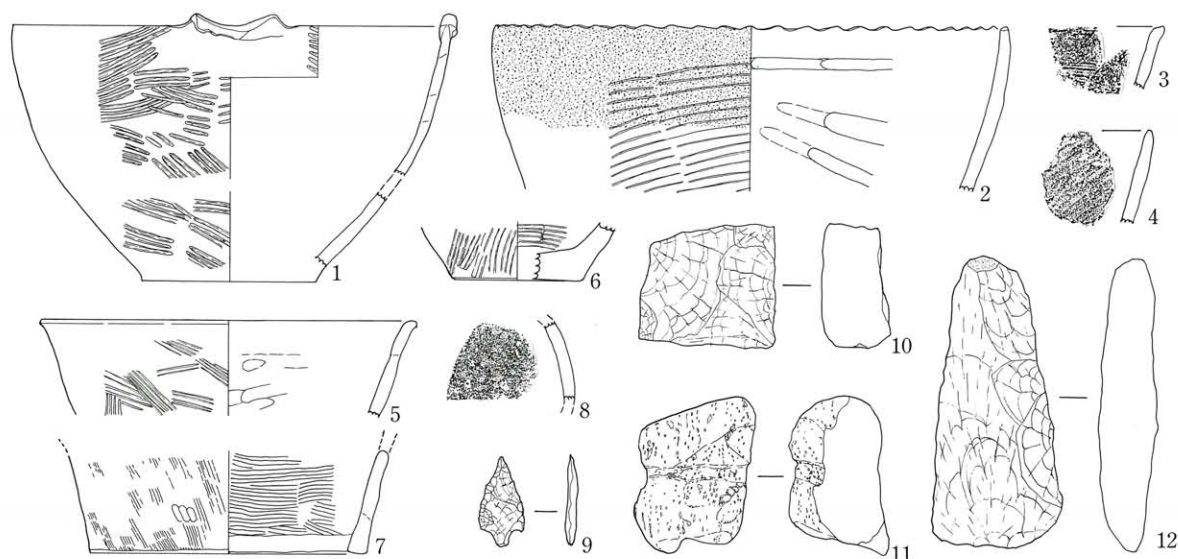


図6 SD15出土土器・石器

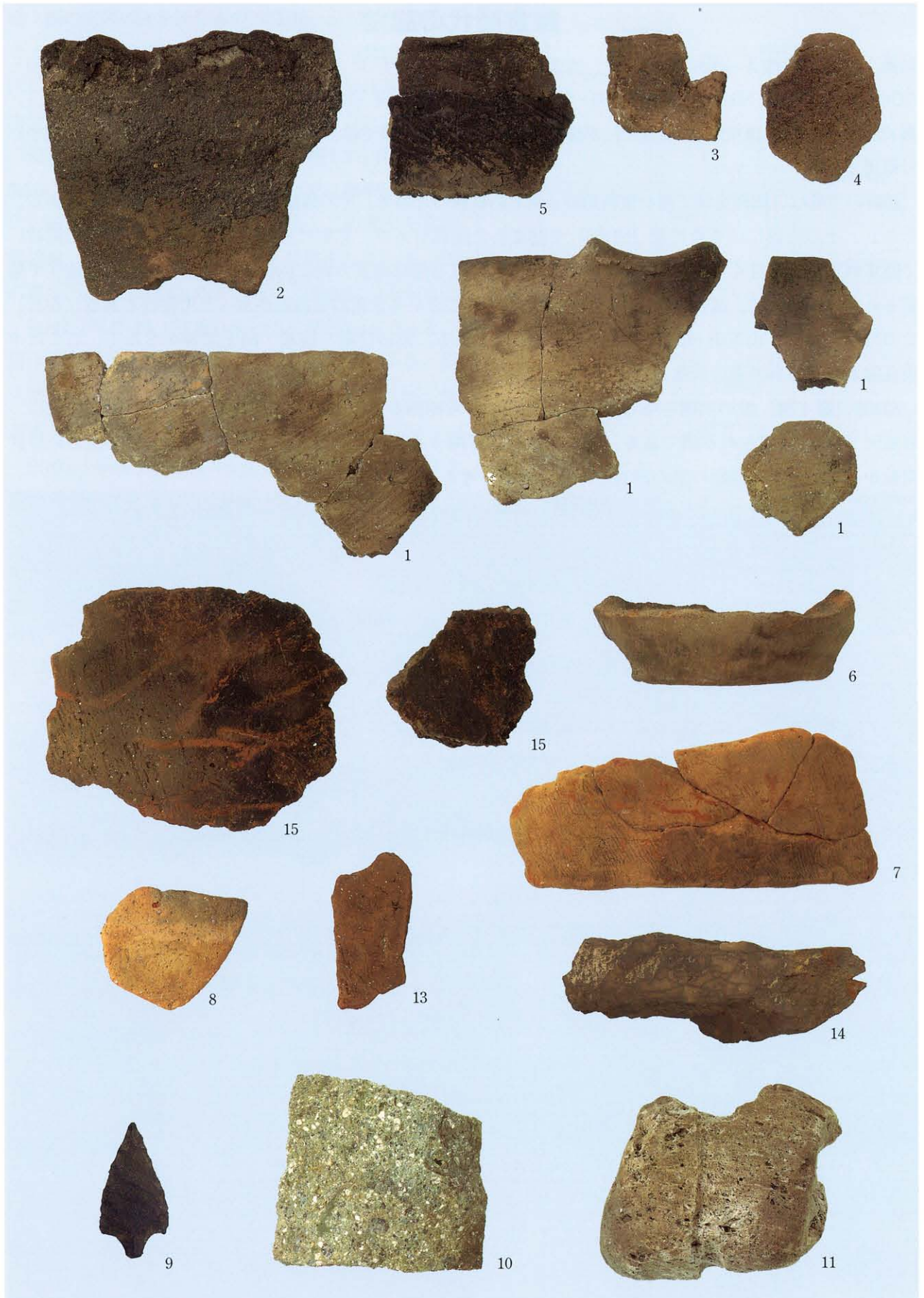


写真14 SD15出土 土器・石器

鎌倉時代の館跡

概要：掘立柱建物2（SB01・SB02）、カマド1（SK08）、井戸6（SK07・SK56・SK58・SK64・SK65・SK70）、堀（SD05・SD18・SD24・SD30・SD34）、塀とみられる溝（SD16）、土坑（SK52・SK57・SK59など）、溝（SD01・SD06・SD21・SD22など）が確認された。これらの多くは、鎌倉時代（13世紀後半～14世紀前半）の遺構である。

館跡の主郭は、周囲を堀で囲む東西約37m南北約41mの方形で、その面積は約1,500㎡（約500坪）である。しかし、その南側にはさらに堀（SD05）で囲まれた副郭があり、北東にも浅い堀（D地区：概報未掲載）で囲まれた副郭が付く（第7図）。南側の副郭を含めると館は南北方向に約55mの規模になる。D地区で確認された張り出しは、堀も浅く、鬼門の方向に当たることから宗教的な施設があった可能性もある。なお、この堀から茶臼・山茶碗が出土しているのも注目される。館の位置・規模・出土品等からみて、ここは中世荘園倉垣荘の有力者の居館と考える。

SD06（第4図）館の南側をゆるやかに蛇行しながら南西から北東方向に流れ、A地区南側でSD12に、B地区でSD01に切られる溝である。館の屋敷地を区画する溝の可能性を考えたが、SD21・SD22との位置関係から中世のある段階の道の側溝である可能性を考える。



写真15 鎌倉時代の館跡（南から）

堀：館の主郭周囲を囲むもの（SD18・SD24・SD34）、2カ所の副郭を区画するもの（SD05・SD18、D地区）、また、館の中心部を東西2つに分けるように南北方向にあるもの（SD30）がある。

SD18-2（写真-15・16）基本的に幅1.2m深さ0.4～0.5mであるが、館への入り口部分では幅が広く池状に（幅6.5m深さ0.8m）なっている。この部分から土師器皿・珠洲・八尾・青磁などが出土している。この溝は、東へ15m行ったところで、SD34につながる。

SD24（写真-15・17）幅1.8～3.2m深さ0.6mである。層序の観察から掘り直されていることが分かる。出土遺物には、土師器皿・珠洲・八尾・木器（柄）等がある。

SD05（写真-18）幅1.8m深さ0.6m東西方向の長さ約24mの溝である。SD18-02・SD24に平行するように配置され、館の正面を防御している。また、西側よりに、幅0.7m高さが堀底から0.2mの土橋がある。出土遺物には、土師器皿・珠洲がある。

SD30（写真-23）幅0.9m～2.5m、深さ0.2m～0.4mで、南ほど幅広で深い。先述の通り屋敷地を東西に区画する溝である。この堀は、堀の東側にカマドをもつSB01があることから、出火した際の防火の意味があったかもしれない。出土遺物には、土師器皿・珠洲等がある。

掘立柱建物およびその付帯施設：1間×2間と2間×3間以上（全体は未確認）の掘立柱建物が確認された。2棟とも床面積は、25㎡程度の建物である。

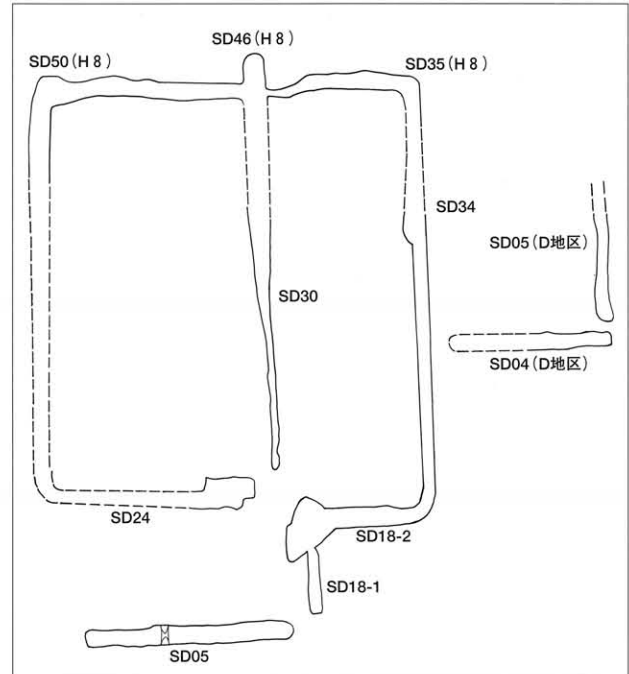


図7 館跡堀配置図

（H8は平成8年度の調査で確認）



写真16 館の入り口（西から）



写真17 入り口部分の堀（SD24）（東から）



写真18 副郭堀（SD05）（東から）

SB01 (写真-19) 1間×2間の建物の北側・東側に付属空間をもち、西側の一部に張り出しをもつ。削平のせいか柱穴は浅くはっきりしないものもある。カマド (SK08) をもち、隣接して木組井戸 (SK07) があることから館の炊屋と考えている。付属空間の柱列は不揃いで小規模である。この部分は、絵図などにあるように壁はなかったのではないと思われる。建物のすぐ北西にあるSK61は、素掘りの井戸の可能性もあるが、覆土中に灰が多く見られることからカマドの灰を捨てた土坑とも考えられる。なお、SK56・SK58の2基の素掘りの井戸は、建物には伴わないと思われる。柱穴内には柱根が残るものはいくつか見られたものの、遺物の出土はなかった。

SK08 (写真-21) カマド遺構である。直径1.5mの円形の土坑を、一旦深く掘り下げたあと炭などで埋め戻し、上層には灰層と厚く焼土がみられる。上部構造は残っていないが、周辺の遺構からカマドの炉壁とみられる激しく焼けたスサ入りの粘土が多く出土しておりカマドとした。出土遺物には土師器皿・珠洲・カマドの炉壁 (写真28-39~41) がある。

SK07 (写真-22) 一辺0.6m深さ1.65mの方形の木組井戸である。井戸枠上部は、幅約20cm長さ70cm以上の板を上下2カ所の横棧で固定し、下部は曲物桶を転用している。また、底には本来曲物桶が据えてあったが、湧水のため横転していた。出土遺物には、土師器皿・珠洲・八尾・カマドの炉壁・漆塗りの櫛 (完形) ・箸のほか、桃の種子・炭化米なども出土した。

SB02 (写真-20) 2間×3間の総柱建物で、西側の調査区外へ延びる。SB01同様、削平のせいか柱穴は浅くはっきりしないものもある。柱穴のいくつかには、立て替えと思われる痕跡が見られる。建物の付帯施設となる可能性があるものには、建物の北側にある素掘りの井戸 (SK65) がある。建物内にある井戸 (SK70) は、その上面に焼土と灰が含まれていたが、掘削の結果井戸となった。井戸が柱穴に切られていたことや、その位置関係から建物には伴わないと考える。

SK65 (写真-24) は、直径0.8m深さ0.6mの素掘りの井戸である。井戸の底から柄のとれた大型の柄杓が出土した。

井戸：建物に伴わない井戸が4基ある。うち、井戸枠に曲物桶を使ったものが2基 (SK64・SK70) (写真-25)、素掘りのものが2基 (SK56・SK58) ある。SK70は曲物桶を2段重ねにし、SK64は1段である。SK70は、上部の曲物桶の下に沈下を防ぐために珠洲甕の胴部片を敷いている。

堀か (写真-26)：館跡の西方約15mに、幅0.6~0.9m深さ0.5m長さ5m~7mの短い溝が互い違いで南北方向に連続するものである (SD16)。この溝からは、時期決定が可能な遺物の出土はなく、時期ははっきりしない。層序の観察でも堀の痕跡は確認できないが、館から旧鍛冶川への出入口と推測する箇所が途切れており、館の西側を区画する堀と推定する。



写真19 SB01 (西から)



写真20 SB02 (西から)



写真21 カマド



写真22 木組井戸



写真23 堀 (SD30)

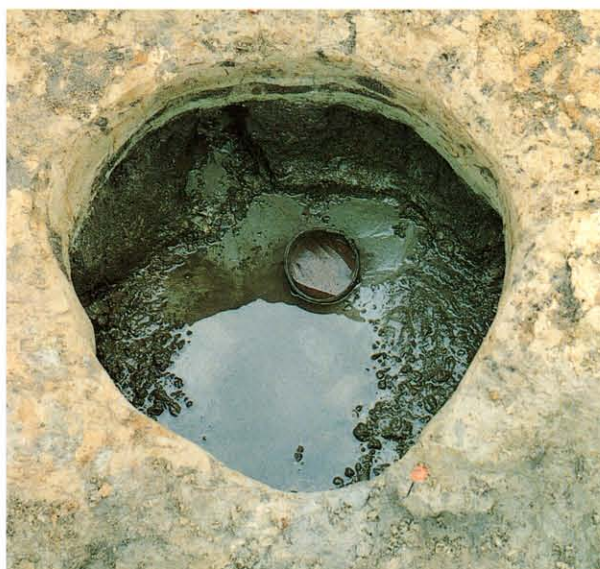


写真24 柄杓が入った井戸



写真25 曲物桶を使った井戸



写真26 堀か

中世の遺物

土師器皿、珠洲、八尾、青磁・白磁、瀬戸美濃、山茶碗、土鍋、鉄鍋、石製品（砥石・茶臼）、木器（横櫛・柄杓・箸・曲物桶・漆器碗等）、種子（米・桃・菜種等）が出土している。多くは館に伴う遺構より出土し、13世紀後半～14世紀前半のものが主体を占める。また、15世紀～16世紀のものも若干出土している。

土器（第8図・写真27～28）：1～7・18～24は、土師器皿である。1は口径7cm器高1.3cm器厚6mmを測り、口縁端部を少しつまみあげている。外面は油煙が付着している。2は口径7cm器高1.5cm。平らな底部から体部がやや外反しながら急にたちあがり、内外面ともに底部と体部の境がはっきりしている。3は口径10cm器高1.1cm。2と同形態のものであるが浅い。4は口径11cm器高2.6cm。底部には糸切り痕が残り、底部と体部との境目は強いナデのため軽い段ができています。内面および口縁部の一部に油煙が付着している。5は口径13cm器高3cm。底部と体部との境目は強いナデにより軽い段ができるが、丸底風である。7は口径17cm器高2.5cm。体部はやや外反しながらたちあがり、口縁端部は面取りされやや内湾する。6は口径13cm器高3cm。体部は丸みを帯びて内湾気味にたちあがり、2段ナデを行う。底部外面には指頭圧痕が残る。他のものより古い13世紀前半のものと思われる。18は口径9cm器高1.5cm。底部外面は厚く丸底風になる。20はややつよいナデで底部と体部との境は明瞭である。21は口縁端部に煤が付着している。22は精良な胎土で丁寧に作られており、体部はやや内湾しながらたちあがる。23は内面に木口状の工具で施されたナデの跡が確認できる。24は口縁端部に面を取り軽くつまみあげている。灯明皿として使用されており、内面は被熱のため赤色化している。10・11は、珠洲甕である。10は口頸がたちあがり口縁端部は短く水平に引き出される。11は口径52cmを測り、口縁端部は方頭である。25・26・28は、珠洲壺である。25は方冠頭形の口縁部である。26は小壺の肩部である。27は壺の胴部片である。全体に油煙が付着しており、内面には内容物と思われる付着物がある。28は胴部片で叩きはやや鈍角化した綾杉文である。8・9・31・32は珠洲すり鉢である。8は口径22cm・器高20cm。口縁端部がやや内傾する。9は口径26cm。口縁端部は方頭で水平に仕上げる。おろし目は12条である。33・34は八尾甕である。胴部破片の出土で数個体分ある。また、井戸と堀など複数の遺構間で接合関係がみられる。胴部の外面の色調は、褐色・暗褐色・にぶい黄褐色で、内面は灰黄褐色・にぶい黄褐色である。調整は、内外面ともに縦方向および横方向のナデがみられる。調整が丁寧な個体と雑な個体があり、雑な調整のものは粘土の継ぎ目が明瞭に残り、焼成もやや悪い。時期差や窯による差なのかどうかは不明である。12は山茶碗の小皿である。口径6.6cm器高1.7cm。完形品で、D地区の副郭の堀中より出土した。底部は回転糸切りで口縁端部に面をとっている。胎土は精良でやや黄色がかかった灰白色である。口縁の一部に油煙が付着し、灯明皿として使用されている。なお、内面はかなり磨滅しており使い込まれたあと灯明具に転用されたものと思われる。14・15は、青磁碗である。14は口径17cmを測り鎗蓮弁文を片彫りで表している。透明感のある灰オリーブ色の釉で、全体に細かい貫入がみられる。15は、高台径5.4cm。透明感のないオリーブ灰色の釉を高台外面まで厚くかける。16は土鍋である。口縁部の小破片である。外面は厚くすすが付着している。36～38は、瀬戸・美濃である。36・37は平碗である。38は古瀬戸の瓶子である。いずれも15世紀後半のものであり、館跡には伴わない。

鉄製品・石製品（第8図・写真28）：17は、鉄鍋である。口縁部の小破片であるが、口径40cmに復元できる。口縁端部はほぼ水平で、縁に蓋受けの屈曲が付くタイプと思われる。35は、茶臼である。茶臼としては全国的に見ても最古の部類と考えられる。径20～21cm程度残高8cmを測る破片である。激しく被熱しており、赤色化している。当時喫茶は、寺院を中心にまだ一部の上流階級の間でたしなまれていた程度で広く普及していたとはいえない。鎌倉幕府の執権や高僧が京都から茶を取り寄せ珍重していたことを示す文献もある。県内の普及具合については文献等はなく、はっきりしない。しかし、当時の越中守護が北条一族であることや、加茂神社と京都とのつながりを考えると、当地に茶を飲める上流階級の文化人がいても不思議ではない。

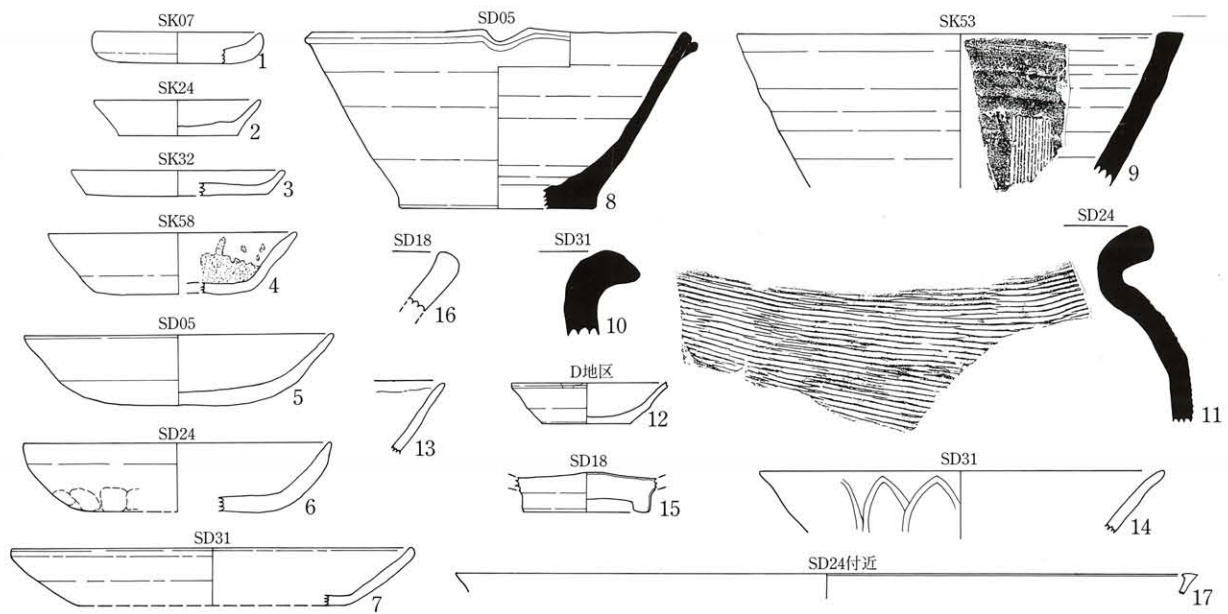


図8 中世の遺物



写真27 中世の遺物 (1) (出土地記入なしはグリッド取り上げ遺物)



写真28 中世の遺物 (2) (出土地記入なしはグリッド取り上げ遺物)

木器・種子など（写真29）：横櫛・柄杓・高下駄の歯・折敷・箸・栓・曲物桶・漆器椀等の木器が出土している。46は横櫛である。SK07（井戸）の底から出土した。長さ11.2cm幅4cm背幅1cm歯数36本を測る。黒漆塗りの完形の横櫛である。歯が粗いので解櫛と思われる。47は柄杓で、柄の部分は欠損している。SK65（井戸）の底より出土した。直径16cm高さ11.6cm厚さ0.5cmを測る大型のものである。その他、堀・井戸中から底板も出土している。曲物桶は、3基の井戸から計5個が出土した。ただし、井戸の多くは盛土保存したため、取り上げた曲物は2個のみである。SK64出土のもの（49）は、直径45cm高さ50cm厚さ1.5cm。かなり丁寧に作られており、厚さ1cm余りの厚い曲物桶の外側にもう一重に薄い曲物を巻き、底部を幅約10cmのタガで緊帯している。内側の曲物の底部には木釘跡があり、厚さ約3cmの底板のアタリがある。また、内面には内容物が付着したと思われる黒いシミが見られる。SK07出土もの（45）は、かなりゆがんでいるが、復元すると直径約21cmを測る。底には木釘跡がある。44は栓あるいは浮子で、縦に割れている。紐で繋ぎ止めるため紐穴がある。42・43は、箸である。このほかに、井戸の中から10本近い箸が出土している。完存しているものはないが、長いもので18cmを測る。48は、高下駄の歯である。欠損品であるが、最大幅14cm残高8.5cm厚さ3.2cmを測る。

このほかに、主に井戸の埋土を洗浄したところ、米・麦・豆・桃などや小骨片などが出土した。



写真29 中世の遺物（3）

近世

A地区中央から西側にかけて江戸時代前期（17世紀前半）の道路跡・採土穴群・溝を確認した。

道路跡（写真30）：平成7年度調査区・平成8年度調査区でも確認され、幅約2mで旧鍛冶川に沿って南北方向に延びている。その両側には、採土穴と前後関係がはっきりしない箇所もあるが、幅0.8m前後の側溝と思われる溝がある。また、路面の所々に灰白色粘土質シルトがみられ、若干の盛土がされていたようである。道路の始まりがどこまでさかのぼれるかは不明であるが、中世の段階にまでさかのぼる可能性が高いと思われる。また、古地図などから旧北陸街道を越え中沖村（現富山市中沖）まで続いていたことや現在の加茂神社の参道は、かつてこの道路の一部であったことが分かる。しかし、少なくとも文政年間には加茂神社の参道となった。

採土穴群（写真30～34、図9）：楕円形もしくは隅丸方形で一部に重複がみられるものの、道の両側に幅6m前後で整然と並んで確認された。これまでの調査で、道路跡に沿って南北200m以上にわたることが確かめられている。それぞれの採土穴は、直径もしくは1辺が1.5m～3.0m深さ0.5m～0.8mのものが多い。土砂の掘削は、組織的に整然と行われたと思われる。また、層序の観察から、一つの穴（A）を掘り終わり次の穴（B）を掘削するときには、Bの不要な土砂をAに投げ入れている感がある。そして、穴の重複が少ないこと、出土遺物が少なく時期幅も小さいことなどから、この作業は、短期間になされたものと推定できる。



写真30 近世の道路跡と採土穴群（北から）

次に、採掘の目的について考える。掘削は青灰色砂層にまでおよび、覆土中の粘土質シルトブロックの量から、これの採掘を目的としたものではない。そこで、採掘された大量の土砂は、大規模な土木工事に使用されたと考える。すると、1662年（寛文2年）に北陸街道と加茂集落（加茂宿）の建設が行われている。採掘した土砂は、その際の造成のため道路を使って運ばれたと推測することができる。採土穴は、中世の館跡部分においても見られる。多少連続して採掘した様子がみられるが、先述した採土穴群に比べ小規模である。また、埋土の様子も異なるものが多くみられ中世段階のものと考えられる。

遺物 (図10)：瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、寛永通寶などが見られ、これらは16世紀後半～17世紀のものである。しかし、その量は少なく、特に道路・採土穴群からの出土は少ない。採土穴が8割程度埋まった後、しばらく滞水していた時期があり、遺物の多くはその時期やSD11・12より出土している。1～4は瀬戸美濃の灰釉丸皿、5～7は越中瀬戸鉄釉皿、8は越中瀬戸丸碗、9は越中瀬戸天目碗、10は越中瀬戸すり鉢で、11は寛永通寶である。

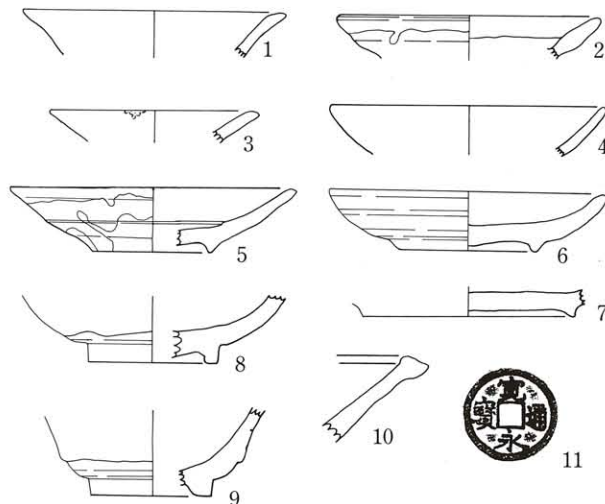


図10 近世の遺物

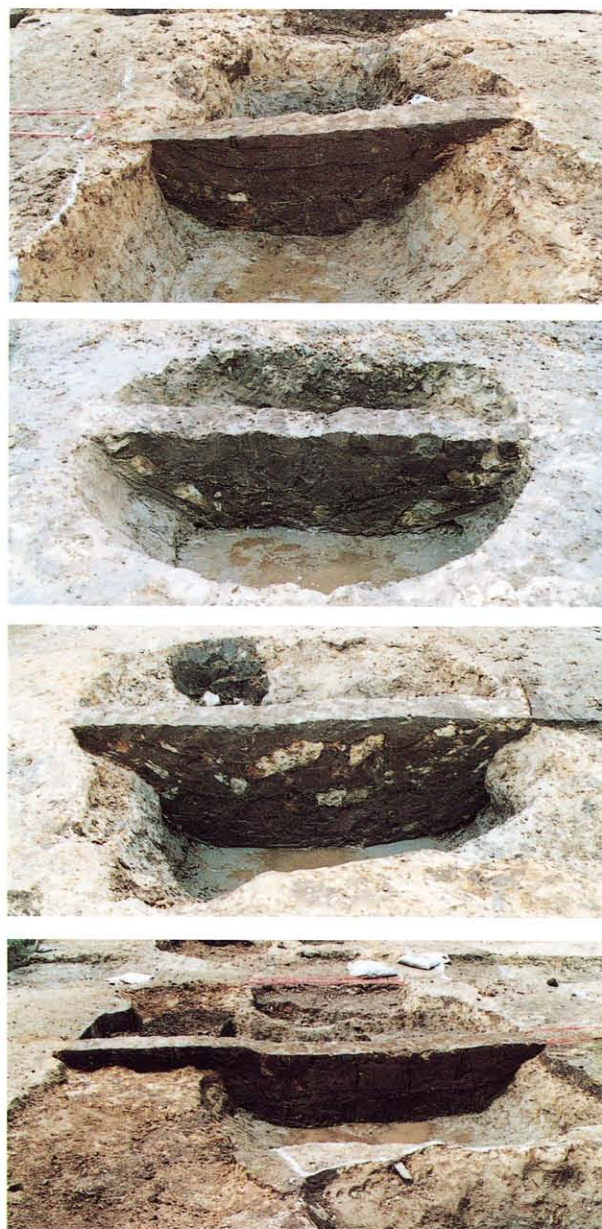
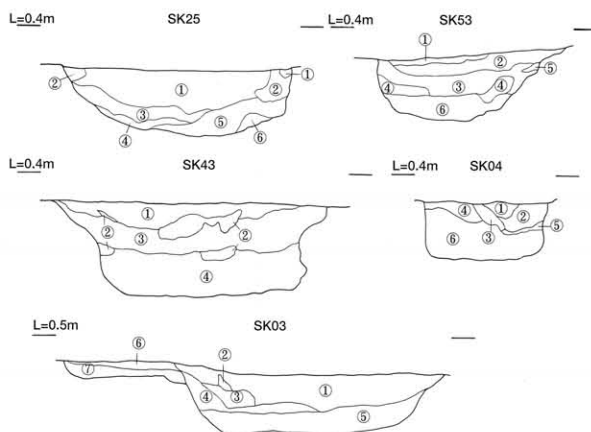


写真31～34 採土穴 (上からSK53、SK25、SK43、SK03)



- | | |
|------|---|
| SK03 | 1 黒褐色シルト (灰白色粘土質シルト極小ブロックと黒色シルト極小ブロック混じり) |
| | 2 にぶい黄褐色砂 (灰白色シルト質砂小ブロック混じり) |
| | 3 黒褐色シルト (明黄褐色砂小ブロックと黒色シルト極小ブロック混じり) |
| | 4 黒褐色シルト |
| | 5 黒褐色シルト (灰白色粘土質シルト極小ブロックとにぶい黄褐色砂小ブロック混じり) |
| | 6 黒褐色シルト (褐色シルト混じり) |
| | 7 黒色シルト (灰白色粘土質シルト極小ブロック混じり) |
| SK04 | 1 黒褐色シルト (褐色砂混じり) |
| | 2 黒褐色シルト (褐色砂混じり) |
| | 3 にぶい黄褐色シルト質砂と褐色シルトの混土 |
| | 4 黒色シルト (にぶい黄褐色シルト小ブロック混じり) |
| | 5 褐色シルト質砂 (黒褐色シルト混じり) |
| | 6 黒 (褐) 色シルト (浅黄褐色粘土質シルト小ブロック混じり) (やや砂多い箇所有り) |
| SK25 | 1 褐色シルト |
| | 2 灰白色粘土質シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトの混土 |
| | 3 黒色砂質シルト (灰白色粘土質シルトブロック混じり) |
| | 4 黒色シルト |
| | 5 黒褐色シルト |
| | 6 灰黄褐色粘土質シルトと灰白色粘土質シルトの混土 |
| SK43 | 1 黒褐色シルト (浅黄褐色粘土質シルト小ブロック混じり) |
| | 2 浅黄褐色粘土質シルトと褐色シルト質砂の混土 |
| | 3 黒褐色シルト (浅黄褐色粘土質シルトブロック混じり) |
| | 4 黒色シルト (褐色砂混じり) |
| SK53 | 1 黒褐色砂質シルト (灰白色粘土質シルト) |
| | 2 黒褐色砂質シルト (灰白色粘土質シルト極小ブロック混じり) (1層より暗色) |
| | 3 黒色シルト |
| | 4 黒色シルト (灰白色粘土質シルト多量と褐色砂多量混じり) |
| | 5 明黄褐色粘土質シルトと黒褐色シルトの混土 |
| | 6 黒色シルト (にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックと褐色砂混じり) |

図9 採土穴土層図

B地区

概要：この地区は遺跡の東縁辺部にあたる。道路による攪乱や先のほ場整備による削平・攪乱が多く、遺存状況は悪かった。遺構は、中世の溝・堀（13世紀後半～14世紀初めのものと14世紀以降）、近世前期（16世紀末～17世紀）の溝・採土穴、近・現代の道路跡があり、ほかに時期不明の土坑が若干確認された。また、遺物の出土量も極く少ない。

中世後期の堀（SD02・SD03、図12、写真36）：A地区の南東端で確認された溝の続きで、B地区内で「L」字に折れ、方形に巡ると考えられる。また、同じくA地区から続いている溝（SD01）を切る。A地区で確認された館跡とは区画の方向が異なり、館跡が廃絶した後の屋敷地の堀である。埋土の観察によると、かなり長い間続していたと思われる、上層には近世前期の溝の埋土と同様の土が堆積している。

遺物（図11、写真35）：珠洲甕・すり鉢、八尾甕、土師器皿、瀬戸美濃、越中瀬戸皿、瓦器、小柄等が出土している。主に、中世後期の屋敷地周辺より出土した。1は土師器皿である。口径9cmを測る。内外面の広範囲に厚く油煙が付着している。2・3・13・14は珠洲である。4・5は越中瀬戸皿である。5は釉止めがしっかりみられ、内面見込みに印花がみられる。6は瓦器の火鉢である。7・8・11は瀬戸美濃で、7は天目碗、8は口径13cmを測る茶壺である。9はキセル、10は小柄である。12は八尾である。

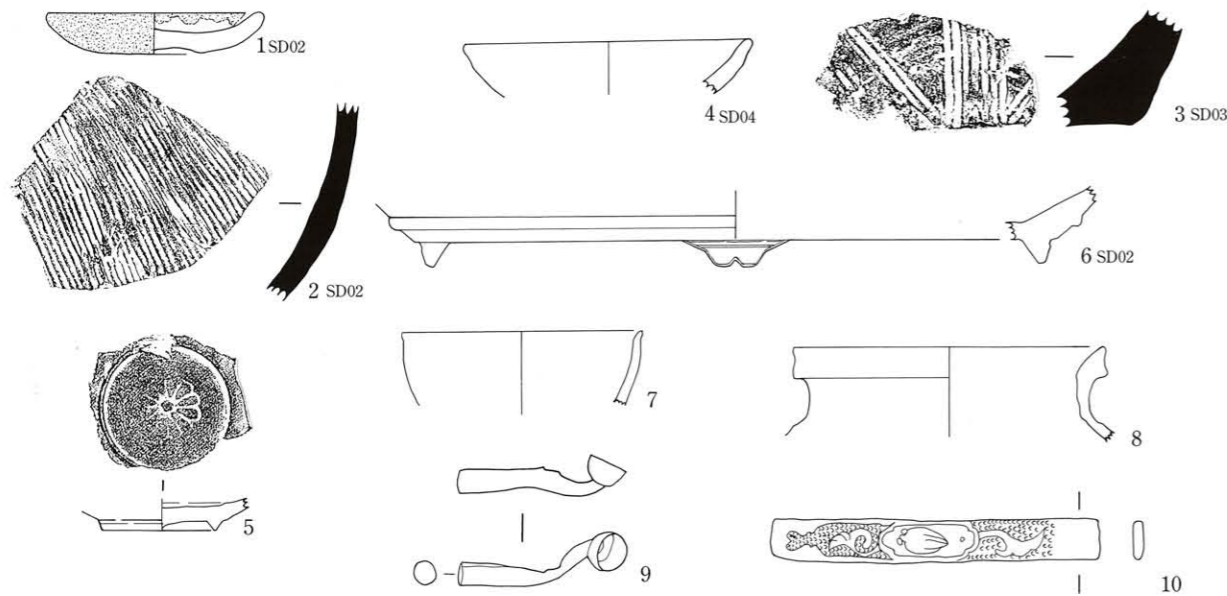


図11 B地区出土の遺物（出土地記入なしはグリッド取り上げ遺物）

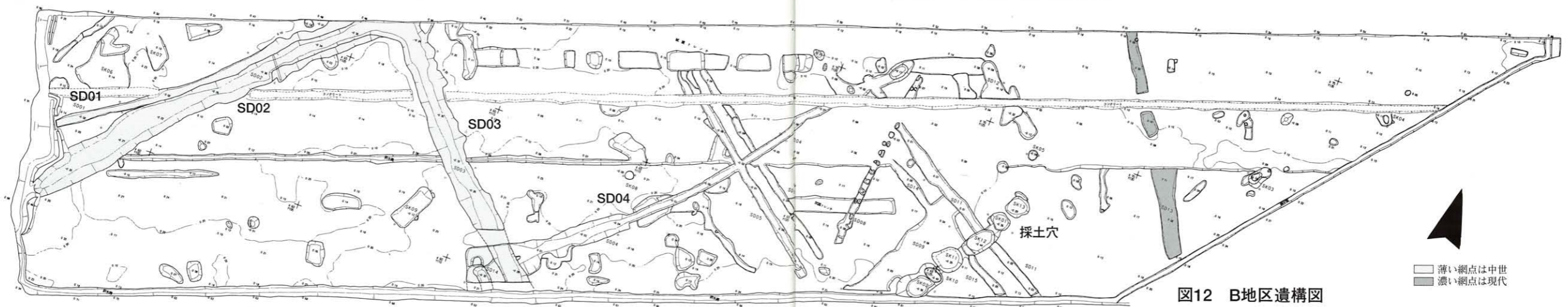


図12 B地区遺構図

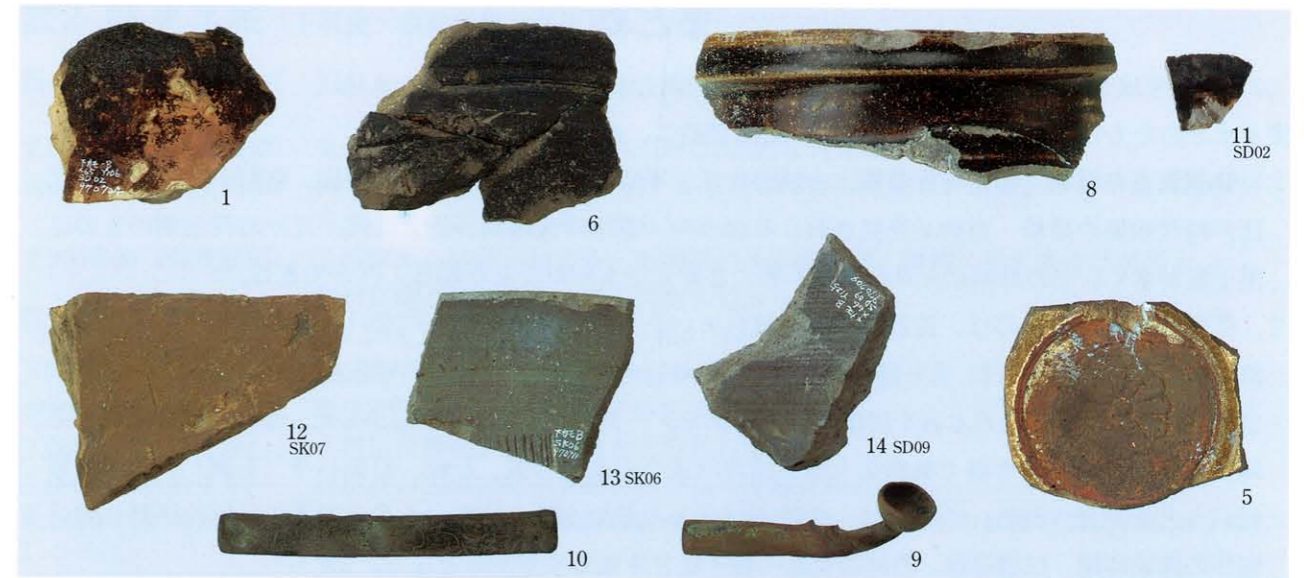


写真32 B地区出土の遺物



写真33 B地区全景（西から）

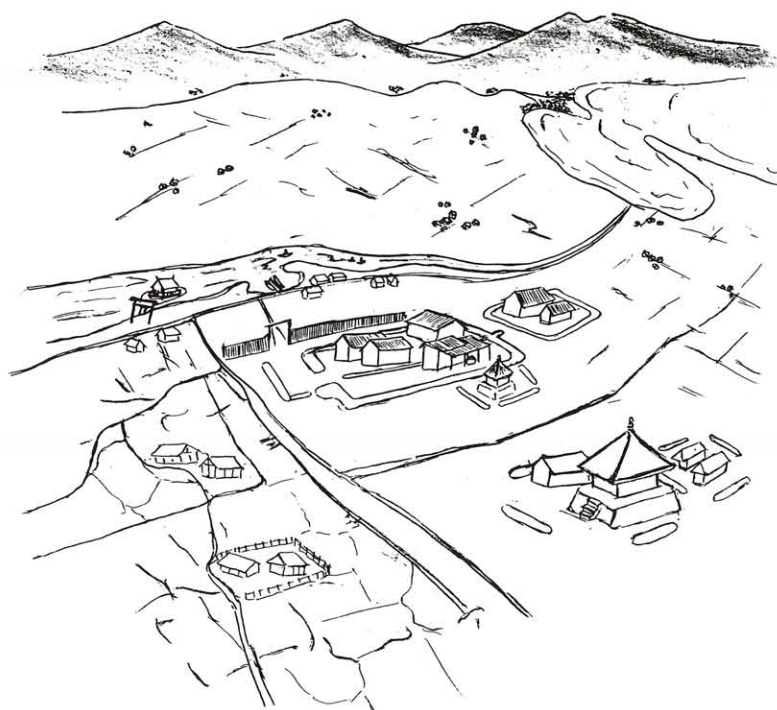
まとめ

本書は、平成9年度に行った下村加茂遺跡の発掘調査箇所5地区のうち、A地区・B地区の発掘調査の概要をまとめたものである。以下、本書の内容を要約し、まとめとする。

- 1、発掘調査の結果、弥生時代前期、古墳時代？、平安時代、鎌倉～南北朝時代、室町～安土桃山時代、江戸時代前期の遺構・遺物が発見され、そのうち、弥生時代前期、鎌倉時代、江戸時代前期のものは、出土量が多く、その時期に人々の活動が特にさかんであったことを知ることができる。
- 2、弥生時代前期のものは、遺跡の西側を流れていた当時の鍛冶川の中に設けられた貯木場とみられる遺構である。貯木場跡には、切り倒された樹木や製材途中の木材があり、その間から農具・紡織具・漁撈具・祭祀具・建築部材などの木器や炭化米・ヒョウタン・ドングリ類などが出土した。また、同じ層位から、縄文時代の伝統を引き継ぐ条痕文土器、遠賀川式系の弥生土器、石鏃、打製石斧（石鏃）、金属を研ぐ砥石なども発見された。これらは、北陸ではほとんど出土例のなかったものであり、富山平野における稲作の開始時期、伝播経路、当時の生活の様子などを知る手がかりとなる。
- 3、鎌倉時代のものは、周囲に幅1～2mの堀を巡らした東西約37m南北約41mの方形敷地を主郭とし、南側と東側にも堀を巡らした副郭を付属させる館跡が検出された。発掘した所では、館跡内の炊屋とみられるカマド跡・井戸・掘立柱建物があり、土師器・珠洲・八尾・瀬戸美濃・中国製青磁などの陶磁器や箸・漆器椀・折敷・曲物・桶・柄杓・横櫛・下駄などが出土した。さらに、県内では出土が珍しい山茶碗や茶臼もある。

館の性格については、遺跡の南側に鎮座する加茂神社との関係が注目される。下村とその周辺地域は、古代・中世においては、「倉垣荘」と呼ばれた京都下賀茂神社の荘園であった。加茂神社は、その総鎮守とされ、社伝によれば、中世には荘官が下向き居住していたといわれており、荘官の館と考えられる。一方、加茂神社の東隣りには、弘仁年間創建と伝えられる真言宗福王寺があり、寺院である可能性や史料にみえない在地有力武士の存在も考えておかなければならない。

- 4、江戸時代前期のものは、道路跡と大規模な採土穴群がある。鍛冶川に沿うように幅約2mの道路があり、その両側に一辺1～2.5m深さ50～80cmほどの穴が約90個、ほとんど隙間なく整然と掘られている。その長さは200m以上に及ぶことがわかっており、土取りが計画的で組織的に行われたことがわかる。その当時の土木工事としては、小杉新町から下村を経て東岩瀬へ通じる北陸街道の建設が知られる。掘削土は街道の造成用に用いられたのではないかと考えられる。（表2参照）



中世の風景

表2 関連年表 (下村史・県史年表などより)

年 代	事 項
6,000年前 (縄文前期)	気候の温暖化により、射水平野は海拔5m付近まで海となった。
3,000年前 (縄文晩期)	縄文中期 (4,000~5,000年前) から射水平野の陸地化が進み、下村ではこの頃から人が住めるようになったらしい。
2,300年前 (弥生前期)	この頃から稲作が始まる。旧鍛冶川から鍬・鋤・竪杵・炭化米などが出土。農耕祭祀が行われる。鉄の使用も始まる。
752年 (天平勝宝4年)	『正倉院文書』で射水郡寒江郷の存在が知られる。
810~824年 (弘仁年間)	福王寺が創建されたといわれる。
900年頃 (延喜の頃)	加茂や白石から須恵器・土師器が出土する。
1,066年 (治暦2年)	下村加茂神社が創建されたといわれる。
1,090年 (寛治4年)	倉垣荘の田地30町が京都下鴨神社に寄進される。
1,184年 (元暦元年)	源頼朝が賀茂神社領新保御厨などの神領における武士の狼藉を禁止するよう命じる。
1,273年 (文永10年)	下鴨神社の社頭犬防並びに築垣築造に際し、倉垣荘はそれぞれ8間~9間分を負担した。
1,333年 (元弘3年)	越中守護名越氏が滅亡する。
1,348年 (貞和4年)	倉垣荘等の荘役や塩飯が無沙汰のため、社家に付せられる。
1,351年 (観応2年)	桃井直常が越中勢等をひきいて京都を攻め、足利尊氏と戦う。
1,359年 (延文4年)	倉垣荘等が社家に付せられる。
1,370年 (応安3年)	桃井方が斯波義將方と婦負郡長沢に戦って敗れる。
1,374年 (応安7年)	倉垣荘役神服綿が無沙汰のため、勅裁口宣が河合祢宜に付される。
1,380年 (康暦2年)	畠山基国が越中守護となる。
1,382年 (永徳2年)	下村と公称したといわれる。
1,383年 (永徳3年)	近衛大五郎が倉垣荘の荘官として下向する。
1,392年 (明德4年)	寒江荘が下鴨神社領荘園として初めてみえる。
1,395年 (応永2年)	近衛大五郎が七間四面の拝殿を新築し、4月4日を祭礼の日と定める。 下鴨神社社務梨木祐有が寒江荘を私領化する。 福王寺が中興されたといわれる。
1,441年 (嘉吉元年)	嘉吉の乱がおこる。この頃から射水郡守護代として神保氏が権力を握る。
1,456年 (康正2年)	造内裏段銭并国役として倉垣荘が7貫文を負担する。
1,472年 (文明4年)	倉垣荘で神保氏が違乱し、朝廷へ提訴される。
1,483年 (文明15年)	倉垣荘上使職の氏人景定が百姓と共謀して年貢を未納する。
1,506年 (永正3年)	加賀一向一揆勢が越中へ攻め入り国衆を放逐する。越中勢および越後長尾為景方が反撃し、婦負郡寒江蓮台寺で合戦する。
1,520年 (永正17年)	放生津の神保慶宗が長尾為景に敗れ自害し、放生津神保氏が壊滅する。
1,532年 (天文元年)	下村の名が初めて史料にみえる。
1,563年 (永禄6年)	上杉謙信の侵攻により、福王寺、海翁寺、阿弥陀寺が焼失したといわれる。
1,585年 (天正13年)	射水・婦負郡が前田利長領となる。
1,624年 (寛永元年)	下村の長左衛門らの努力によって、牛ヶ首用水の開削が始まる。水下の村々から百姓が集まり三十三ヶ村ができる。
1,646年 (正保3年)	下村は越中1,383か村内で第3位の大村であった。
1,662年 (寛文2年)	小杉新から下を経て東岩瀬に通ずる新往環道 (北陸街道) ができ、下村が宿駅の指定を受ける。
1,674年 (延宝2年)	福王寺が再建されたといわれる。
1,699年 (元禄12年)	鍛冶川の川筋を直線に改修した。また、新堀川が掘られた。
1,712年 (正徳2年)	京都下鴨神社の末社が射水郡内に22社ある。

あとがきにかえて

このところ、遺跡の発見が相次ぎ、歴史を塗り替える新事実が毎日のように新聞を賑わせています。これは日本の国土の各地で開発が相次ぎ、それに応じて事業実施のための緊急発掘調査が続々行われていることを示しています。数多の急ぎ過ぎる開発が折角の遺跡の保存に問題を残しはしないかという考古学者や識者の懸念をよそに、この現象は一般には好感を持って迎えられ、マスコミが大きく取り上げた遺跡の見学説明会は予想外の人手で溢れるのが常であります。

下村加茂遺跡の場合も昨年8月23日（土）の現地説明会には快晴に恵まれ二百人を優に越える老若男女がはるばる参集、発掘を担当された県埋蔵文化財センター係員の話に熱心に耳を傾けました。目にする竖杵や鋤・鎌などが約二千三百年前と見られる弥生時代前期の稲作農耕に使われたものと見られ、とすれば北陸の稲作農耕の歴史がこれまで考えられていたよりも百年早まることになるろう、下村の歴史も大きく書き換えられることになるという話を聞いて、参加した何人からも「下村、昔から由緒ある土地柄と話には聞いていたが、それを遺跡の発見によって裏付けられて見ると、ひときわ、下村に愛着が沸くというもんだ」といった感想が聞かれました。これに力を得て、11月2～3日に開かれた下村芸術文化祭には当教育委員会として、会場の農村環境改善センターの一室を特に埋蔵文化財展示コーナーにあて、広く一般の参考に供したところであります。

発掘された遺物の今後の公開については、やがて『とねりこの里』（仮称）内につくられる管理棟（クラブハウス）の中に空調を利かせた展示室を設けて行うこととし、必要な収蔵庫も用意することにこのほど予算措置（10年度当初予算）がなされました。展示室やその前庭は、それなりに工夫を加え、より親しみ易いものにしたいと考えています。村民や近回りの町の家族連れが公園内の貸農園で野菜作りに精出し、ついでにパークゴルフのコースを回り、クラブハウスで“まっさら”のコシヒカリのおにぎりなど軽い食事をとり、遺跡展示室の前を歩いて考古学や郷土史の一端に触れる。あるいは村内外の団体が親睦パークゴルフ大会をこの公園で行い、終わっての反省会にクラブハウスへ向かう途中展示室の前で足を止める。そんな光景を思い浮かべながら、加茂遺跡が多くの人々に知的関心を引き起こすことになればと期待しています。長い間、地下に埋もれていた文化財は久々に沢山の人々の凝視に逢って、さぞかし気恥ずかしい思いをすることでありましょう。

終わりに、発掘調査に当たって直接ご尽力頂いた県埋蔵文化財センターの方々をはじめ事業の順調な進行にご協力頂いた関係のすべての皆さんに心から感謝申し上げます。

平成10年3月

下村教育委員会
教育長 芝田 壮臣

お世話になった方々・機関

赤沼多佳・宇野隆夫・桑原隆博・木本秀樹・楠瀬勝・工楽善通・島田修一・杉山左近・塚本英子・筒井紘一・新田 洋・林 健亮・穂積裕昌・三輪茂雄・水本克夫・邑本順亮・山崎雅恵・山田昌久・吉井亮一・吉田清三・渡邊昌宏・富山県林業技術センター木材試験場・富山県〔立山博物館〕

報告書抄録

ふりがな	とやまけん いみずぐん しもむらかもいせき							
書名	富山県射水郡下村加茂遺跡							
編著者	久々忠義・越前慶祐							
編集機関	下村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒933-0204 富山県射水郡下村加茂中部 893 TEL 0766 (59) 2101 〒930-0115 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764 (34) 2814							
発行年月日	西暦1998年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもむらかもいせき 下村加茂遺跡	とやまけん 富山県 いみずぐんしもむら 射水郡下村 かもちゅうぶ 加茂中部	16383	383005	36° 44′ 32″	137° 8′ 17″	19975001 ～ 19971119	4,625	農免農道及 び水郷の里 建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
下村加茂遺跡	貯木場 集落・城館 土取り場	弥生時代前期		川 1		条痕文土器・弥生土器 石鏃・打製石斧・砥石・軽石 鍬・鋤・竪杵・編板・紡錘車 経巻具・緯打具・櫂 たも網・桶・鳥形・剣形 柱・板・柄、炭化米・ヒョウタン		
		鎌倉時代		堀立柱建物 2 堀 6・井戸 6 カマド 1 塀 1・溝 1		珠洲・八尾・土師器皿・青磁・白磁 瀬戸美濃・山茶碗 砥石・茶臼 漆器椀・柄杓・曲物桶・箸・下駄 横櫓		
		室町時代 江戸時代前期		堀 2 道路 1 採土、穴 90		珠洲・八尾・土師器皿・瀬戸美濃・瓦器 瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津 寛永通寶・小柄・キセル		

富山県射水郡下村 下村加茂遺跡

発行日 平成10年3月19日

発行 下村教育委員会

〒933-0204

富山県射水郡下村加茂中部 893

TEL 0766 (59) 2101

編集 富山県埋蔵文化財センター

印刷 (株) チューエツ

表字題字：下村村長 庄司 弘による



遺跡遠景(南上空から)